

第6講 1981年2月11日の講義

文責:H松

1. 前回の講義で伝えていたこと・今回の講義で言いたいこと(pp.141-145)

✓ アフロディシアの伝統的知覚を組織し支配していた 2つの重要な原理がどのようにして次第に崩壊していったのかを確かめること。

①社会的・性的同型性の原理

②主体の能動性の原理

✓ 結婚の孤立化、分離、価値づけ・・・結婚は社会的諸関係への大小さまざまな適合性に従って性的活動を価値づけするような体系の最も高度な拠点として考えられなくなってしまった⇒①の原理の崩壊

✓ ストア派の哲学者たちにとっての結婚・・・自然にかなう振る舞い、行動。

↓フーコーが指摘したいこと＝ストア派・ストア派に影響を受けた人々が結婚が自然に基礎をもっているという観念に対してどのような意味を正確には与えているのかということ

✓ クセノフォンのテキスト『家政管理論 第七章』

若き既婚者イスマコスが妻に向けた発言

結婚当初・・・結婚とはどのようなものか、どのようなべきか、いったいなぜ彼女と結婚したのかという発言を慎む

妻がなついたとき・・・なぜ結婚したのか、なぜ選んだのか、なぜ両親が自分に妻を与えたのかを話す。

「私たちがあれに面倒を抱えているからではない」

⇒双方が結婚しうる誰かを見つけることに面倒はないぞ、ということ。床を共にするという事実以上のものだということ。

⇒イスマコスと両親は、誰と家をもに分かち合い生まれてくる子供たちをともに分かち合えば最善であるかを熟慮していた。

✓ 結婚の2つの目的

①彼らが老いたときに支え、助けるべき子どもたち

②家庭

イスマコスの言葉

「もろもろの動物の種族が途絶えないようにと、この組み合わせがお互い一緒になって子供作りをする。そして次には、この結び合わせによって、彼ら自身の老後の世話をしてくれるものを確保することが、少なくとも人間にはもたらされる」

⇒神々は共同体(コイノーニア)の利益のためにつがいを組み合わせただ！という考え。

↓ここでの共同体とは？3つの面から定義される！

✓ 共同体の定義

①人類が発展することを可能にする生殖が問題である

②重要なのは子供の誕生

③家庭の問題

→クセノフォンは、両性が構築する共同体の役割と責任を定義

✓ クセノフォンの考え

①男性…外で働け！

②女性…子供を養育しろ！蓄えを守るために家にとどまれ！

③人類…蜂群のようなもの、共同体の大きな善のために役割・機能・責任を引き受けている。

④人間の区分…神が熟慮して2つの性に分け、男性・女性をつがわせることに決めたのだ！

↓この定義における人間の夫婦の目的・目標

・人類全体、都市の存続、両親を支えるための子供たちの誕生

・富の管理、その保持、その増大

↓

結婚のあらゆる目標…外在的な諸目標、夫婦そのものはそれ自体の目標ではなくなる。

夫婦はそれ自体の何か(都市、子供、財産等)が問題である限りにおいてのみ、正当化される！！

↓このように書かれていた一方、紀元1・2世紀のテキストでは…

2. 紀元1・2世紀のテキストで言われはじめたことの概要(pp.145-146)

✓ 夫婦は非常に特別で、絶対的に特殊で、他の何のものにも還元されえない性質をもつようになる。

①夫婦は自然の秩序において、自然の合理的配置によって定義された場所を持つ

→二人で生きることはそれとは別の何かによって目標を与えられるのではなく、二人で生きることそれ自体が自然の目的のひとつだということ。

②夫と妻のあいだに作られた関係は絶対的に特殊で社会的諸関係の一般的領域とは形の異なる関係である

③都市に対する結婚の機能はそれ以前のテキストにおいて定義されていた機能とは異なる

3. ムソニウス・ルフスのテキスト(pp.146-149)

✓ 自然が人類を2つの性に分けているという事実

✓ 自然がそれぞれの心に他方に対する魅力・誘引力を注ぎこんだという事実

→人間は自分自身のために生きるためだけに作られたのではなく、その性的活動に至るまで、**他者を気にかけなければならない**ということ！

✓ 人類…ひとつの蜂群のようなもの。はぐれたミツバチは死んでしまう。人間も同様に、**自分で自分の面倒を見て、自分で必要を満たさねばならないのであれば死んでしまう。**

↓クセノフォンのテキストと同じようなテーマにみえる

違いは何か？

誘引力についての説明に、違いがみられる。

✓ 男性と女性を結びつける誘引力…**餓えた欲望(エピテューミア、パトス)**は強烈！

↓他方の性に対する欲求ではない

①ホミリア…身体的な関係、性的関係、二つの身体の結合

②コイノーニア…生の共同体、生存の共同体

- ✓ 自然…人間はシュネイナイ(性行為を行うこと)であること、シュゼーン(共に生きること)を自然が望んでいるのだ!

⇒子供を作り、民族が永遠に続くようにすることが、目的となっている。

↓クセノフォンとの違い

クセノフォン…両性の関係に理論的な判断や倫理的焦点化はない

ムソニウス・ルフス…生に関するすべての物事にまつわる存在の結合

自然が望んだのは、身体への接近への欲望が、それ自体において、そして同時に、存在の共同体への欲望であることだった。

(※日本語の意味がよくわからないので、英訳を確認してみました。)

Nature wanted that the desire for the coming together of bodies be, in itself and at the same time, a desire for shared existence. だそうです。

⇒「自然は、身体的に結びつきたいと男女が望むことが、同時に人生を共にしたいという願いでもあるかのように定めた」、くらいの意味に思って読んだほうがいい説??

存在の共同体といわれるとハテナが浮かんでしまいましたが、*shared existence* (「共に生きること(共同生活・生の共有)」)くらいに思えるといいのかなと思いました。

4. ヒエロクレスの論説『結婚について』(pp.150-151)

- ✓ 自然…人類を群れで生きる生き物、集団で大勢で生きる生き物とした
→2人で生きること、夫婦で生きること、二人一組で生きることが望むことを自然が人間に対して運命づけているという考え。
=複数人の社会性、それらこそが人間を社会のなかで生きよう、都市のなかで生きよう、人類全体の一部となるよう運命づけている
- ✓ 社会性…彼(夫)が妻と実現するもの
⇒エウスタテースな生、ゆるぎなく、堅固な生を、地に足のついた生を、バランスの取れた生を生き抜くことでもある

5. アリストテレス『ニコマコス倫理学』と『政治学』(pp.152-157)

- ✓ 人間…ポリス的であるよりも二人で生きる存在である
- ✓ 主人と奴隷…人間が生きるときに必要な関係性(男女の二者関係だけでなく、この二者関係も必要!)
⇒家族…男性—女性、主人—奴隷の関係が家族→家庭に。
⇒男性と女性が共に生きることの必要性は、まったく定義されない。
- ✓ 友愛…境遇を同じくする者の間をつなぐもの
- ✓ 親と子の間…最も強い友愛がある
(親→子に強力な友愛)
夫婦間の友愛…特殊なものではなく、友愛の一般的な形の1つにすぎない
※友愛の強さ 夫婦<<<<両親

子<<<親

- ✓ 夫婦間の友愛が激しい理由・・・男性と女性が継続的に助け合えるから、行っている活動が有益な活動であるという事実にもとづく快樂があるから。

⇒有用性という理由で、結婚が成り立っている。本性の違いではない。

↓ムソニウス・ルフスはどうか？

- ✓ 夫婦間の友愛・・・一形式としてはみている。ただし、なぜ成り立つかの理由に差。

いかなる友人もその友人にとって、妻がその夫に対してそうであるほどには、そして夫が妻に対してそうであるほどには、愛しいものではありえない。なぜなら、妻はつねにその夫の心にあるからである。(p.156, L12-14)

例:アドトメスとアルケステイスの物語

妻だけが自分自身を夫のために犠牲にすることができる

→両親と子供の関係よりも強い！ということ。

=ストア派にとって、婚姻関係は友愛関係の極限にある！

6. 婚姻関係を成立させている要素(pp157-161)

- ✓ ①有機的統一

アンティパトロスの話:何本かの運動する脚を持つことはいいことだろうし、そちらの方が一本や二本だけあるよりもなおいいだろう、同じように結婚も理解しなければ。

- ✓ ②身体と魂の共同体

結婚においては身体に至るまで、身体に加えて、魂に至るまですべてが共有されている。

- ✓ ③完全に混ざり合う複数の物質全体の融合(クラシス)

プルタルコスの話:3つの混合の型がある！

(1)別々の要素からなる混合・・・軍隊のような混合[1人を殺しても軍隊は残る]

(2)互いに組み合わせて調整する混合・・・家を建てたり船をつくるような混合[大梁がなくなると家は崩れるが大梁は残ったまま]

(3)それによって動物や生物がつくりだされる混合・・・絶対的にまとまっている存在が生み出す混合

↓結婚にあてはめて考えると・・・

(1)床での快樂のためだけに結婚する場合・・・床をともにした後に別れることになるが、本人たちはそれぞれまた違う人生を生きる

(2)財産あるいは子供だけを目的とした結婚・・・統一体を解散してしまったら財産も子供も散り散りになるので、家や船のように結婚は続けられる必要がある

(3)ひとつの個体か一匹の動物のように形作られる結婚・・・2つの要素に自律性・個性はない。男性女性と区分されることもない。同一の実体を形作っているから。

※水とワインのように混ざり合うイメージ。

7. アリストテレス・クセノフォン・ストア派の違い(p162)

	結婚は・・	夫婦はなんで結びつく？	支えているもの
アリストテレス	自然なものである	男女が助け合えるから (有用性を感じられるから)	社会的関係 (特別な本性をもっているというわけではない)
クセノフォン	自然なものである	人類全体、都市の存続、両親を支える子供たちを生み、育てるため 富の管理、その保持、その増大のため	社会的関係 (特別な本性をもっているというわけではない)
ストア派	自然なものである	身体と魂の共同体を作り出すため	異なる型の関係 異なる本性の関係 (長所と短所のエコノミー、共通の利益のエコノミーとは別な関係性で成り立っている！)

✓ キリスト教・・・異型性を使用することになる。

✓ 次回・・・都市における婚姻関係の役割をお話する、どのような基本単位の機能を果たしているか示す

8. H松の感想・疑問

「結婚は、自然なものである」と、どのテキストでもサラッと語られてしまっているところに目をつけて、それぞれの思想における「自然」とはいったい何から生まれているのかを分析していくところにフォーコーらしさを感じました。アリストテレス、クセノフォン、ストア派、ムソニウス・ルフスの結婚観の違いを通して、結婚や男女関係がどのように理解されてきたのかが論じられ、「自然」と思われていることの変遷が丁寧に描かれていたように思います(十分に私が整理しきれているかは自信がありませんが・・・汗)。

アリストテレスにおいて結婚は家政やポリスの維持のための、あくまでそれぞれにとって有用な結合として位置づけられており、クセノフォンも男女の役割分担と家の管理を重視していたこと。夫婦の友愛よりも親子、特に親から子に対する友愛のほうが大きくないか？と言われていたことは、考えてみると納得だなと思いました。その一方、ストア派では夫婦の結びつきそのものに価値が見出されるようになり、ムソニウス・ルフスは、身体の結合への欲望と「共に生きることへの欲望」が自然という概念によって結びつけられていると考えていた点、そこでは、結婚は単なる生殖や家の維持の手段ではなく、二人が一体化した共同生活を営み(そこにお互いの個人としての主体性はないということか??)、運命を共有する倫理的な共同体として理解されているといたかったのかなと。個人にとって良く生きることが、みんなという共同体にとってよく生きることに移り変わる制度・メカニズムとして結婚を考えようとしていたのか？と、考えさせられながら読みました。